



口絵 「阿弥陀三尊来迎図」静岡市立芹沢銚介美術館所蔵

(研究資料紹介)

静岡市立芹沢銈介美術館所蔵「阿弥陀三尊来迎図」

門脇 佳代子

Items of interest from the collection of Serizawa Keisuke
Introducing the *Amida Sanzon Raigō-zu*

KADOWAKI Kayoko

キーワード: 阿弥陀ヶ滝 参詣曼荼羅 白山信仰 長滝寺

要旨

芹沢銈介によって収集され、現在静岡市立芹沢銈介美術館が所蔵する「阿弥陀三尊来迎図」は、画面の右半分に雲に乗って飛来する仏菩薩を、左半分に滝や洞窟といった自然の行場と点在する堂舎、およびそれらを巡る6人の人物を描いている。他に類のないこの図様は、岐阜の阿弥陀ヶ滝にまつわる伝承に基づくと考えられる。それは、天文年間(1532-1555)長滝寺の道雅法印がこの滝の洞窟に入り護摩を焚いていたところ、忽然として阿弥陀仏の霊像が滝に映ったというものである。本図は参詣曼荼羅に通じる物語性と描法の素朴さが見られ、江戸時代後期の制作と考えられる。阿弥陀ヶ滝は山岳霊場として名高い白山の信仰圏にあり、美濃馬場の長滝寺に所縁が深い。18世紀以降、白山への登拝者は宗教関係者から武士や学者、文人へと広がりを見せ、紀行文や文芸作品に阿弥陀ヶ滝が取り上げられるようになる。これらの中で阿弥陀ヶ滝のイメージが再生産され、道雅法印による阿弥陀感得を追体験する、本図のような作品が生まれたと考えられる。

Abstract

The Shizuoka City Serizawa Keisuke Art Museum has in its collection the *Amida Sanzon Raigo-zu*, a painting containing several special motifs. The right half of the painting depicts the comings and goings of Buddha. On the other hand, the left half depicts a waterfall, a cave and pilgrims. Based on these motifs, it is presumed that the painting represents the legend of Amidagataki Waterfall on the slopes of Mt. Hakusan, Gifu Prefecture. According to the legend, a 16th century Buddhist monk was praying in a cave at Amidagataki Falls when Amitabha appeared to him.

Amidagataki Falls is thus one of the sacred sites of Mt. Hakusan. From the 18th century onward, people besides Buddhist monks began to climb Mt. Hakusan more frequently, and Amidagataki became the subject of travelogues, poems and paintings. Among these, the *Amida Sanson Raigo-zu* is a particularly precious work reliving the Amidagataki legend.

はじめに

染色家・芹沢銈介(1895-1984)は、独自の審美眼をもって世界各地のさまざまなジャンルの美術工芸品を収集したことで知られるが、その内の約4500点が静岡市立芹沢銈介美術館に伝わっている。これらを紹介するシリーズ図録「芹沢銈介の収集」が2015年より順次刊行されており、その第6巻は『仏画・仏像・神像』(静岡市立芹沢銈介美術館編集発行 2018年)である。この図録刊行に先立ち、2017年に仏

教を中心とする宗教主題の所蔵品(絵画・彫刻)の悉皆調査が実施され、筆者もそれに参加し詳覧する機会を得た。その際、本稿で紹介する「阿弥陀三尊来迎図」(口絵)について、白山信仰の霊場のひとつである阿弥陀ヶ滝にまつわる伝承との共通点があることを、学芸員の白鳥誠一郎氏よりご教示いただいた。

本図は阿弥陀の来迎を主題とするが、画面の右半分には山中に飛来する仏菩薩を、左半分には滝や洞窟といった自然の行場とそこに点在する堂舎、およびそれらを巡る6人の

人物を描いている。江戸時代後期の仏画の特徴がみられ、寺社や霊場の縁起を説く参詣曼荼羅に通じる物語性をもった、一風変わった阿弥陀来迎図である。

そこで本稿では、画中の自然景観や登場人物、来迎する仏菩薩の検討を通して、本図において阿弥陀ヶ滝の伝承がどのように図像化されているかを明らかにする。また、白山参詣曼荼羅の諸本と比較しながら本図の特性を検証し、近世における白山参詣の広まりを踏まえその制作目的を考察する。

1. 阿弥陀ヶ滝の伝承

図像を読み解くにあたり、はじめに阿弥陀ヶ滝をめぐる伝承について確認をしておこう。

岐阜県中西部に位置する阿弥陀ヶ滝(郡上市白鳥町前谷)は、長滝、洞ヶ滝とも称する。長良川支流の最上流にあたる前谷川にかかり、幅約7m、落差約60mの豊富な水量を誇る名瀑のひとつである。

阿弥陀ヶ滝の古い伝承としては、東海地方からの白山登拝の拠点である美濃馬場にあたる長滝寺⁽¹⁾(岐阜県郡上市)の由来譚に登場する。「長滝寺真鏡」⁽²⁾それによると、養老6年(722)、白山開山である泰澄大師が元正天皇の不例にあたり勅命によって都で玉体を加持した。その帰り、美濃の白山中宮に参詣すると、金の幣帛が三本直立し、神女が姿を現わして「長ク衆生ヲ利益セン」と告げて姿を消したので、泰澄は三社の神殿を改造した。さらに、神女の告げにより西北の山中にあるという清泉を求めると、その通りに断崖より滔々たる滝の直下しているのを発見したので、泰澄はこの泉に斎戒沐浴して中宮に奉仕した。この時の祥瑞に感じ、寺号を長滝寺と称するに至ったという。なお、阿弥陀ヶ滝は、長滝寺から直線距離にして北北西に約4.5kmの地点にあるが、往古はひと続きの地として長滝寺の内に含まれたという⁽³⁾。また一説には、阿弥陀ヶ滝につづく前谷川を、建長3年(1251)5月武蔵権守頼保が鷲見郷を賜った際に長滝寺領との境界にしたと伝わっている⁽⁴⁾。

その後、戦国時代の天文年間(1532-1555)のこととして、阿弥陀ヶ滝にまつわる新たな逸話が登場する。すなわち、長滝寺の道雅法印がこの滝の洞窟に入って護摩を焚いたところ、忽然として阿弥陀仏の霊像が滝に映り、これにより阿弥陀ヶ滝と名付けられたというものである。「新撰美濃志」⁽⁵⁾この伝承の主人公である道雅(元龜3年[1572]没)は、長滝寺の経聞坊に隠居していた僧で、享祿2年(1529)に長滝寺の阿名院を再興し開基となった。なお、阿名院には現在、道雅所縁の品として自筆の賛文をもつ室町時代の肖像画「道雅

法印像」⁽⁶⁾が伝わっている。

「阿弥陀三尊来迎図」の典拠と考えられるこの逸話を伝える「新撰美濃志」は、尾張藩士・岡田啓が天保初年(1830)頃から万延元年(1860)にかけて編纂した地誌であり、前谷村の記述の中で、文政5年(1822)の「阿弥陀ヶ滝遊覧紀行」(以下、「遊覧紀行」)を元に解説をしている。「遊覧紀行」は、尾張国のある人物(不詳)が文政5年8月25日より8月29日にかけて阿弥陀ヶ滝を訪問した際に立ち寄った場所や、見聞きした内容を記した道中日記である。19世紀に下る紀行文であるため道雅法印による阿弥陀感得説話の成立時期は不明だが、後述する白山参詣の隆盛から、江戸時代には定着していたことが窺われる。

長文になるが、「遊覧紀行」より、旅の目的地である阿弥陀ヶ滝での体験、およびそこで目にした情景について、以下に引用する。なお、図1は享保6年(1721)写の『長瀧寺道之記』に描かれた「阿弥陀瀧之図」である。

前谷村を過ぎて少し行けば路傍に木戸ありて番所あり案内の者滝へ行く訳を断って通る。ここを過ぎて山坂を通り谷川に出て独木橋を渡り(長さ四、五間)山路を歩き又谷川に出て川中の道を伝ひて川を越えて又山路を行く。(前谷村を過ぎてこの所迄道至って悪し道細く石高く山坂険しい道なり)往還の道(加賀白山への往来道なり)を分れ滝の方へ行く坂を下れば山間に少し田畑のある所に出る。

これより阿弥陀ヶ滝の水流れる溪あり、谷の中に大いなる岩石多し先ず谷の左の山腹をよじ登る基だ嶮峻なり。定めたる道なし案内の者を先にしてこれに付いて行く。この所は藪、笹等が薄葎など背丈に余りていやが上に生茂りて足元は更に見分け難く押分け押分け進み行く。

この道一步を過ぎる時はたちまちに百尺の谷に顛倒す、その危なき事限りなし。叢中に蝮、蛇を見る事数度又これに恐れる事大いなりとかくして行く事四丁ばかりにして溪間の岩石を飛び越し辛うじて向かいの山に移り(即ち谷の左岸なり)倒れたる朽木をのり越え木の根に取付き草を押分け岩を伝ひ、又行く事四丁漸くにして滝の辺りに至る。

滝高さ百間ばかり

飛泉巖頭より奔飛して碧潭に落ち恰も数百の布を瀑す如く落ちる。

音、諷沓として遠近に響く凄愴知り。

嶺の草樹蒼鬱として日光を遮り陰涼心に徹し人をして毛骨凄然たらしむ。

滝の左の方に(滝より南なり)屏風岩とて屏風を立て廻りたる如き数十丈の絶壁あり。又、滝の右に深さ六間幅十六間



図1 岐阜県図書館蔵『長瀧寺道之記』より「阿弥陀滝之図」
(竹下一政編『阿弥陀ヶ滝遊覧紀行』1987年の挿図より転載)

高さ七尺ばかりの巖窟あり。上より水が滴る故に笠を被りて入る。奥に小祠あり扉をあければ小さき銅像あり、取り出して巖窟の外へ持ち出し見れば馬頭観音なり、又元の如く祠中に納めて巖窟を出る。この巖窟昔長瀧寺の道雅法印と云う人この巖窟に入りて護摩を焼しかば、阿弥陀仏の御姿が滝に写り給ひし故に阿弥陀ヶ滝と名づくとなん云伝う。滝の裏へも行けば行けるけれ共水、煙雨の如くなる故に予は行かず。暫く溪間の岩に腰かけ仰ぎて滝を眺め観賞極まりなし。⁽⁷⁾

現在の阿弥陀ヶ滝は、夏場を中心に多くの人を訪れる人気の観光スポットになっており、滝まで続く石畳の散策路が整備されている。江戸時代ほどの悪路を進む危険はないが、大日ヶ岳を構成する安山岩の岩壁を背に水煙をあげる飛瀑には圧倒される。「遊覧紀行」の作者が避けた滝の裏側には、高約2.5m、幅約17m、奥行約7mの自然の洞窟があり石仏が並んでいるが、現在は立ち入りが禁止されている。なお、滝の近くにある阿弥陀堂は大正6年(1917)に建立されたものである。

2. 静岡市立芹沢銑介美術館所蔵 「阿弥陀三尊来迎図」(口絵)

紙本着色。本紙の法量は実測で縦47.7cm、横51.9cmを示す。若干の皺や虫喰い穴はあるものの、彩色は鮮明で、顔料や金泥の剥落もほとんど見られない。本紙の状態は極めて良好である。折条がないことから、当初より掛軸に仕立てられていたものと推測され、表装には清王朝の官服の裂(あるいはモチーフとしてそれを模した織物)を使用する。外題として「三尊来迎佛 行者登山」「福海禅寺 什品 傳來」の墨書(図2)が確認されるが、芹沢銑介が入手する以前についての詳しいことはわかっていない。

絵の内容については、まずは画面の左右をそれぞれ確認する。はじめは左側から見てゆこう。ごつごつと切り立った崖の間を一筋の水が流れ落ち、滝壺に近い水場では衣を脱いで水垢離する男性が描かれている。実際の阿弥陀ヶ滝に比べると水量が少ないようにも感じるが、滝の右手奥には2人の男性が暗い洞穴の中を鎖につかまり進む様子が見え、滝と洞窟を組みあわせると阿弥陀ヶ滝に合致し、また(図1)と構図が近似することも偶然ではないと思われる。なお、険しい道や崖を鎖につかまりよじ登る姿と解釈できなくもないが、道雅法印の阿弥陀感得の逸話を踏まえると、洞窟を進む姿とみるのが自然であろう。

ところで、参詣曼荼羅に登場する滝には、縁起に由来するものと、参詣人を描く場合の二通りがある。前者の例としては、「熊野那智参詣曼荼羅」の諸本で、那智滝に打たれ気絶した文覚上人が不動明王の使いである矜羯羅童子・制吒迦童子に助けられるという甦りの場面がある。また、滋賀県が多賀大社蔵「多賀社参詣曼荼羅」では滝とともに多賀社の



図2 「阿弥陀三尊来迎図」墨書

末社犬神明神の縁起が描かれる。類似説話は全国にあるが、犬を連れて猟に出た狩人が一夜を過ごすことになり、犬が吠え続けるので腹を立てその首を切り落とすと、首が飛びあがって狩人を狙っていた大蛇に噛みつき食い殺し

た。そこで、狩人はその地に祠を建てて犬の鎮魂祭祀をした、という話である。描写としては滝から身を乗り出す竜で表わすことが多い。一方、P.V.フグラー氏蔵「長命寺参詣曼荼羅」では行者が滝に打たれるさまを描くが、固有のエピソードに登場する人物ではない。同様に、大阪の瀧安寺蔵「瀧安寺参詣曼荼羅」では画面左上方に滝を描く。この寺のある箕面山は早くから滝行の秘所として開けた修験の道場である。雄大な滝に対して人物が極端に小さいが、滝壺では2、3人が滝に打たれる様子が確認できる。「阿弥陀三尊来迎図」の水垢離場面に関しては、無名の登場人物という点では後者に該当するが、後述するように阿弥陀出現にまつわる一連のストーリーに関わる可能性も捨てきれない。

続いて画面の右半分を目を転じると、阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三尊が、山の奥より彩雲をたなびかせて飛来する。来迎印を結ぶ阿弥陀如来は踏み割り蓮華のうえに立ち、右上方より斜めに来迎する。観音菩薩は両手に蓮台を捧げ持ち、腰をわずかに折る。仏菩薩はなで肩でやや肉付きがよく、皆金色に表わされ、金箔の上から顔や手足を墨線で描き起こす。髪も墨描きである。慎重に筆を運んでいるものの、両菩薩の上半身の肉どりには不自然なところもみられる。衣には金泥で流水文や松菱文など複数の文様を描いている。脇侍菩薩の冠と三尊の唇に濃い赤色を、蓮台にはくすんだ緑を用いる。参詣曼荼羅には円相に坐する本地仏を描き込むことがしばしば行われ、中には奈良県の矢田原第三農家組合蔵「富士参詣曼荼羅」のように山頂に阿弥陀三尊が斜めに来迎する例もある。ただし、画面に占める大きさが異なり、本図ではその存在感が圧倒的である。

以上、左右それぞれの図様を見てきたが、両者をつなぐのが、山際の道に立って阿弥陀三尊を見上げる一人の男性である。視線の先に巨大な仏の出現を捉え驚く彼は、臨終にある往生者ではなく、また俗人の姿であることから、室町時代の僧道雅でないことも明らかである。おそらくこの人物は同時代の参詣人として描かれており、阿弥陀ヶ滝で道雅法印が阿弥陀仏を感得したという奇瑞を追体験しているであろう。ところで、点在する行場と堂舎に沿って描かれる6人の人物はいずれも男性で、二人ずつペアになっているように見える。すなわち、①滝に向かう人物と滝壺で水垢離をする人物、②山道の途中で阿弥陀三尊を見上げる人物とその後方に立つ人物、③洞窟の中を鎖につかまり進む二人である。衣服の色も白と青で分かれており、①→②→③の順に時間の推移を表わす異時同図の可能性を指摘したい。参詣曼荼羅では特定の人物を繰り返し登場させ、その人物に巡拝を

仮託して絵解きをすることがある。

また、「阿弥陀三尊来迎図」では仏菩薩に金箔や金泥を多用し、対して山や滝といった自然景には青・黒・茶を用いて色味を抑え、水気を含んだ伸びやかな筆遣いが見られる。こうした淡彩と濃彩の対比も心地よい。抽象化された道・建造物・人物の表現には参詣曼荼羅に通じるものがある。ただし、参詣曼荼羅では霊場の堂舎や信仰対象を複合的に描くのが一般的であるが、本図の場合、阿弥陀ヶ滝を単独でクローズアップし、それにまつわる阿弥陀の霊験譚を同時代に引き寄せて描いている点に特徴がある。仏画としての描写をみるに、江戸時代後期18世紀以降の可能性が高いものと考えられる。

3. 「阿弥陀三尊来迎図」の特性

—白山参詣曼荼羅との比較から—

先に「阿弥陀三尊来迎図」について、参詣曼荼羅的な描き方が見られることを述べたが、白山信仰における参詣曼荼羅と比較することで本図の特性をより明確にしたいと思う。

霊峰白山に対する信仰圏は越前(福井)、加賀(石川)、美濃(岐阜)の三国にまたがり、主峰の御前岳(2702m)と、その西北の大汝嶺(2680m)、南方に位置する別山(2309m)を中心とする。長寛元年(1163)頃に原型ができたと考えられる「白山記」によれば、天長9年(832)に越前・加賀・美濃の三馬場(白山信仰の拠点、かつ登拝の起点)が開かれ、そこから白山参詣を行うと記されている⁽⁸⁾。白山の山頂を禪定と呼び、禪定への道は越前・加賀・美濃から異なるルートが存在するが、それぞれを越前禪定道・加賀禪定道・美濃禪定道と呼ぶ。越前馬場は白山中宮平泉寺(現在の福井県勝山市の平泉寺白山神社)、加賀馬場は白山寺(現在の石川県鶴来町の白山比咩神社)、美濃馬場は長滝寺を指す。「三方の馬場より御山に参詣するに道俗恒沙喩ふべくも非ず」(「白山記」⁽⁸⁾)とあり、平安末期には出家に限らず俗人の登拝者も少なからず存在したと推測される。

ところで、白山曼荼羅と総称される一群の絵画には、垂迹神・本地仏を描くものと、山景・寺社景を描くものが複雑に入り乱れ、さらに、3つの禪定道に由来してそれぞれ系譜を異にする。白山曼荼羅の研究史については、令和2年に杉崎貴英氏が富山県南砺市の白山宮から見つかった新出の「白山本迹曼荼羅」を紹介した中で整理をされており、また垂迹曼荼羅の系統と参詣曼荼羅の系統に分けて遺品一覧を載せている。⁽⁹⁾それによると、参詣曼荼羅の系統とみなされてきた作例は以下の7点がある。

【越前】

福井市坂井市・国神社本
福井県勝山市・平泉寺白山神社本

【加賀】

石川県白山市・林西寺本
石川県能美市・能美市(旧辰口町)本
石川県小松市・那谷寺本

【美濃】

岐阜県郡上市・上村家本
岐阜県郡上市・白山中居神社本

美濃系の参詣曼荼羅としては、黒田晃弘氏が絵解きの復元を試みる中で詳述された「上村家本」と「白山中居神社本」が知られている⁽¹⁰⁾。かつては共に白山絵図と呼ばれ、裏書にある慶応元年(1865)頃、同一時期に上村家によって制作されたとみられる。両者はほぼ同じ図様であり、石徹白の入り口にあたる桧峠からつづく美濃禅定道の全容の中に、点在する名所・旧跡、および泰澄やその母の逸話を描いている。なお、参詣者の姿はなく、登場人物も景観に対して際立って小さく、石徹白の集落全体を概観するように民家を数多く描いている点に特徴が表われている。合わせて同年同月の年紀をもつ2幅の「白山由来絵伝」が伝来しており、絵解き台本によって明治30年代頃まで絵解きが続けられたという。美濃禅定道の起点は長滝だが、白山中居神社のある中間地点の石徹白から本格的な白山登山がはじまる。石徹白は修験者の出入りで栄えた土地であり、近世まで最奥の上在所集落は、夏は登拝の道案内と宿坊を営み、冬は御師として各地に信仰を広め御札を配ることを生業とした。「白山由来絵伝」の絵解きの起源について小林一葵氏は、元文元年(1736)頃からおこった平泉寺との禪定別当職出入を契機とし、宝暦年間の神道騒動を通し白山中居神社の再興と活路のために成立したのではないかとされている⁽¹¹⁾。「上村家本」と「白山中居神社本」を制作した上村家はこうした石徹白の住人であり、山岳宗教集落としての事情が制作背景に想定できる。

ところで、新出資料として杉崎貴英氏が紹介された白山宮の「白山本迹曼荼羅図」⁽⁹⁾は、画面上方で雪の白山連峰を背景に白山三所の本地仏と垂迹神を表わす一方で、画面の下半分には美濃禅定道の景観を描く。参詣人の姿はなく、尊像や殿舎によって寺社あるいは聖地を示す図様が名札とともに描かれている。その配置は必ずしも正確な対応関係にはないが、総じて美濃側から白山へと至る道筋を表わす景観であるという。なお、長滝寺は画面のほぼ中央に位置するが、阿弥陀ヶ滝は確認できない。また本図の特徴とし

て、武人の肖像とみられる特定の人物を描くが、大汝嶺の本地である阿弥陀の白毫からその男性に向かって光条の射す様子は往生者への来迎を示すと考えられる。背面墨書銘に元和7年(1621)の年紀と由来が書かれており、かつて長滝寺の真如坊が所有し門外不出であったものが明治の神仏分離の頃に寺を離れたと推定されている。美濃系の参詣曼荼羅はこれまで江戸時代末期の「上村家本」と「白山中居神社本」しか知られておらず、本地垂迹曼荼羅に分類されるが景観の比重が大きいことも含め、17世紀初頭に遡る本図の存在は注目される。

白山参詣曼荼羅の古例としては越前系の「国神社本」⁽¹²⁾がある。本図は最上部に白山の三つの峰を配し、その下に禅定道(登山道)、画面中央から下部にかけては越前馬場の平泉寺を描く。景観年代から天文16年(1547)から弘治年中(1555-1558)の作と考えられている。参拝者や修行者の他、説明的な人物が登場するなど、参詣曼荼羅の範疇に入るが、一方で境内では社殿の位置に背屏を置き礼盤に坐す神々の姿が描かれ、礼拝対象としての形式を有する垂迹曼荼羅としての要素をあわせ持っている。

さて、白山曼荼羅の中でもっとも参詣曼荼羅らしいのが、加賀系の「能美市本」⁽¹³⁾である。三幅(各縦159.5cm、横81.0cm)でひとつの画面を構成し、白山および禅定道の見どころを景観描写的に捉えている。幅背の墨書名から、寛政元年(1789)以前の江戸中期の作で、白山比咩神社本殿の建立などに関わった加賀藩御用大工の清水峯充により寄進され、筆者は金沢の郷土史家楠部肇と考えられている。本図の制作目的を探る手掛かりとして、大阪大氏は、画中に実在の真言僧で加賀禅定道からの白山登山再興を訴えた寶代坊の僧房が描かれていることに注目された。すなわち、当時、白山の杣取権を巡って三馬場で争論となり江戸の寺社奉行で裁判となっていたが、寶代坊は加賀の権利を主張するため、元禄16年(1703)加賀禅定道沿いの社祠に安置してあった神仏像を神輿に乗せて金沢経由で江戸まで運び、上野の護国寺や江戸城の將軍綱吉の生母桂昌院の前で開帳を行った。結局寛保3年(1743)加賀側は敗訴し、以後白山山頂の管理は越前の平泉寺が行うことになるのだが、これにより加賀の別当の人々が加賀禅定道沿いに社祠や室堂を建立し、入山料を徴収することは禁止され、加賀禅定道は衰退していった。こうしたことから、大阪氏は「加賀禅定の描かれた白山曼荼羅は、寶代坊が江戸城へ白山の神仏を運んでご開帳した際に、掛軸にして持って行き、絵解きをしたのではないかと推測をされている⁽¹⁴⁾。

かつて、昭和62年に大阪市立博物館で開催された特別

展「社寺参詣曼荼羅」では、立山曼荼羅と白山曼荼羅について、享受の歴史などの面において参詣曼荼羅との親縁関係を認める点はあるものの、制作背景や描写という点を重視し参詣曼荼羅のジャンルに含めないという立場がとられた。⁽¹⁵⁾大量の粉本を伝来する熊野那智参詣曼荼羅が、勧進聖の活動とともに16世紀から17世紀にかけて多く制作されたことを参詣曼荼羅の典型としたためである。先に紹介したように、白山参詣曼荼羅とされる遺品は図様に統一性がなく、制作時期や制作主体もまちまちであるため、これらを包括的に論じることは困難である。しかしながら、こうしたヴァリエーションの多さは霊場が広域におよぶことや複数の信仰拠点をもつことを踏まえれば当然といえよう。参詣曼荼羅の定義については諸説あるが、ここでは大高康正氏の述べるように、参詣者を勧誘する内容を描く霊場案内足りえるもの⁽¹⁶⁾として広く捉えたい。

そこで改めて、白山参詣曼荼羅の諸本と比較して「阿弥陀三尊来迎図」をみると、白山という巨大な信仰圏にあって、阿弥陀ヶ滝という一霊場に限定していることに特徴がある。また、景観描写に力点を置くものが多い中で、本図は登場人物の行動や仏菩薩の出現に鑑賞者の目が向くよう描かれており、極めてストーリー性が高い。阿弥陀ヶ滝は美濃禅定道の起点近くに位置するも、美濃系の「上村家本」と「白山中居神社本」、あるいは新出の白山宮「白山本迹曼荼羅図」において目立って取り上げられることはないが、後述するように江戸後期には名勝として広く知られるようになる。来歴が不明なことから参詣誘致を目的に制作されたと断定することはできないが、その描写は正統な絵師のものではなく、いわゆる参詣曼荼羅に通じる素朴さをもっていると同時に、宗教的な絵解きを想定できることから、参詣曼荼羅の要素をもつ絵と言えるであろう。

4. 白山参詣と近世の文芸作品にみる阿弥陀ヶ滝

白山開山とされる泰澄は、養老元年(717)36歳で初めて白山に登り、御前岳で白山妙理大菩薩(本地十一面観音)、別山で小白山別山大行(本地聖観音)、大汝嶺で大己貴(本地阿弥陀)を感得したと伝える。「泰澄和尚伝」⁽¹⁷⁾三神を拝した泰澄は、さらに山頂に留まり千日修行したとあるが、こうした修行僧らによって白山への登山道が開拓されていったのであろう。白山の山頂からは9世紀後半の遺物が発見されており、おおむね平安前期には三馬場と三禅定道が成立したとされている。美濃禅定道は、駿河・近江・三河・尾張(静岡・愛知など中京方面)から長良川を遡っていく道で、

長滝寺を出発した後、大要は以下のように進む。

長滝寺—松峠—石徹白—美女下—銚子ヶ峰—一ノ峰—二ノ峰—三ノ峰—別山—御舍利山—油阪峰—南龍ヶ馬場—室平—御前峰頂上⁽¹⁸⁾

長滝寺は美濃馬場として、天長5年(828)には神社仏閣三十余宇が建ち並び、六谷六院に衆徒三百六十坊を擁し、参詣の男女が踵を接して集まったという(「長滝寺真鏡」⁽¹⁹⁾)。この数をそのまま信じるわけにはいかないが、この頃にはある程度の寺観は整っていたであろう。白山は修験の聖地であり、その登拝は数々の行場を巡ることでもあるが、古来の山岳信仰に密教を主とする仏教思想が習合して成立した修験が最も盛んになるのは、鎌倉時代から室町時代にかけてである。

一方で、白山山頂での社殿造営や杣取の権益をめぐる三馬場の間でおこった白山争論は、戦国時代を経て江戸時代まで続いた。この決着は、福井藩と加賀藩とを巻き込んだ抗争を経て、寛文8年(1668)白山麓18ヶ村が江戸幕府の天領となり、18世紀前半には越前馬場の平泉寺がほぼ白山を管轄下に置くに至った。

この頃から、白山への登拝者は、宗教関係者から武士や学者、文人へと広がりを見せ、特に江戸後期以降になると、下記のような登山記録が紀行文などとして残されている⁽²⁰⁾。代表的なものとしては、宝暦10年(1760)池大雅が友人の高芙蓉、韓天壽とともに富士山・立山・白山の三山に登った折のメモ帖を貼り交ぜた「山岳紀行図」、天明5年(1785)加賀禅定道で白山を目指した儒学者金子有斐(鶴村)の「白山遊覧紀行」、大聖寺藩士の小原益が文化10年(1813)に白山登山した際に著わした「白山紀行」、文政5年(1822)紀州和歌山藩士で本草学者の畔田伴存が採葉目的で白山に登った際の「白山草木志」、越前藩士加賀成教による文政13年(1830)の「白山全上記録」、同じく越後藩士高田保浄による天保4年(1833)の「続白山紀行」、天保12年(1841)飛騨高山の役人山崎弘泰が命じられて雷鳥捕獲のため登山した際の「山分以」、越前藩士天方彝之助による弘化4年(1847)の「白山行程記」、金沢の俳人である後藤雪袋による万延元年(1860)「白山紀行」など、枚挙に暇がない。先に紹介した文政5年(1822)の「阿弥陀ヶ滝遊覧紀行」も、こうした白山登山の紀行文の流行と同時期に執筆されている。

また、紀行文の他に、以下のような阿弥陀ヶ滝をモチーフにした詩歌⁽²¹⁾や絵画作品が作られた。

題阿弥陀滝

神嫌寄景凡人覩 犖确礪溪来往難

一片白雲過嶺上 剛風吹落石屏間 桜井文之進拝

阿弥陀滝を見侍りて

天(ノ)原雲の水尾より鳴る神の とどろき落る瀧かとそ見る 春正
世にたくひ那知の高根にくらぶれば 此の滝波やたちまさるらん 舟木
これは、延宝4年(1676)2月20日、京都から歌道者山本春
正ならびに能太夫・同役者三人が、八幡から長滝寺参拝の
ため郡上藩桜井文之進の案内で来寺し、21日雨の中で滝を
見物し、22日に帰った。その際に詠んだ歌である。

続いては、延宝5年(1677)6月、八幡の住人池戸見例が白山
山に参詣した際のもので、長滝寺にて次の歌を詠んでいる。

麓にハ齡久しき杉の杜 嶺に落るも長滝の音

また、阿弥陀ヶ滝の近くの阿弥陀堂の傍らにある石碑に
は、幕末の美濃に生まれ明治から大正にかけて活躍した俳
人の花の本聴秋(上田聴秋)の「虹を吐いて夏よせつけぬ滝
の音」の句が刻まれている。

この他、天保4年(1833)頃に制作された葛飾北斎の浮世
絵シリーズ「諸国滝廻り」の一枚「木曾路ノ奥阿弥陀ヶ滝」も
有名である。円形の滝口から落下する瀑布と、突き出た崖の
上で滝見を楽しむ3人の男性を描いており、滝口の形状や、
その中に本来は見えるはずのない落下前の水流を描く様子
が、見るものの意表を突く。こうした奇抜な発想について、日
野原健司氏によれば、北斎は現地での直接的な取材はして
おらず、阿弥陀ヶ滝を想像で描いている可能性が考えられる
という⁽²²⁾。さらに氏は、現地での検証を踏まえ、栃木県日光
市にある裏見の滝を挙げ、丸くえぐられる形状の滝口を見せ
ることや、左手に小高い岩場があり現在は滝を見渡す展望
台となっていることから、「北斎のイメージーションだけから
生まれたのではなく、ある程度実際の風景に基づいている
と考えられる」ことを指摘している。阿弥陀ヶ滝は木曾街道
からかなり離れていることもあり、江戸の庶民が直接足を運
ぶことは多くなかったにせよ、北斎の「諸国滝廻り」刊行を機
に、滝の名所としての認識が広まったことは想像に難くない。

おわりに

先に「阿弥陀三尊来迎図」について参詣曼荼羅の要素を
もつ絵とする私見を述べたが、元来参詣曼荼羅は制作主体
となる集団の利益に基づいて描かれる。そこで、本図制作の
契機となる可能性として、長滝寺の動向を確認しておく必要
があるだろう。

鎌倉時代に全盛を極めた長滝寺であるが、やがて戦国時
代になると浄土真宗の勢力が拡大し、末寺が転宗するなど、
次第にその勢力は衰えていった。長滝寺の伽藍の建立と修
復の歴史を述べた清水真澄氏によると⁽²³⁾、江戸時代には、

領主の寄進などは微々たるものになり、寺独自で建物の建
設、維持の費用をまかなわねばならなかったようである。例
えば樹木を売る、上納米の納期を延期してもらい、講をつく
るといった対策や、仏像をはじめ宝物の出開帳を行っている。
出開帳では、享保4年(1719)に別山・奥院の屋根の上葺
のために、3月1日から21日まで、開山泰澄の像を開帳し、仏
像や絵画なども陳列したところ、近郷から多数の参詣者が
来て、結果的には経費をひいて銭百五貫百文、金二十二両
一分の利益を得ている。「経聞坊文書」⁽²⁴⁾また、文政13年
(1830)には名古屋の栄国寺で出開帳を行ったが、この時は
損金を出し失敗に終わっている(「文政留記」⁽²⁵⁾)。注目すべ
きは、陳列品の中に、享保4年は「白山絵図」、文政13年は
「白山大絵図」なるものが含まれていたことで、具体的様
は不明だが、「能美市本」のように開帳による絵解きを想像
することもできるだろう。なおここでは、大絵図の呼称から
「阿弥陀三尊来迎図」のような個別の伝承を絵画化したもの
ではなく、長滝寺周辺を含む広域を対象とする絵図が想起
される。

18世紀前後より、白山への登拝が宗教者以外にも広がる
にしたがい、阿弥陀ヶ滝は白山登拝における起点の行場と
しての役割のみならず、人々の間に神聖な滝を「遊覧」と
いう意識が芽生えていったと理解できる。やがて詩歌や紀行
文、絵画作品などによって、阿弥陀ヶ滝のイメージが再生産
されていくが、そうした中で道雅法印による阿弥陀感得を鑑
賞者が追体験する、本図のような作品が生まれたのではない
だろうか。近世社会の中で寺社が名所化していくことは避
けられない流れであるが、「阿弥陀三尊来迎図」では、むしろ
信仰に回帰している点が興味深い。

付記

本稿を成すに当たっては、調査に際して静岡市立芹沢銚
介美術館のご高配を賜りました。また写真掲載に当たり、関
係各位からご理解を賜りました。英文要旨については東北
福祉大学のKen Schmidt教授にご協力をいただきました。
末筆ながら感謝申し上げます。

註

- (1) 長滝寺は白山中宮長滝神社と同一境内にあり、明治の神仏
分離までは両者一体で白山中宮長滝寺と称した。本稿では
長滝寺の表記に統一する。
- (2) 「長滝寺真鏡」宝幢坊文書 白鳥市教育委員会編『白鳥町史
史料編』白鳥町 1973年 pp.411-412
- (3) 竹下一政編『阿弥陀ヶ滝遊覧紀行—白山美濃馬場近世の滝
参り 美濃国郡上郡前谷村』前谷観光開発協会蔵版 1987年
p.25 編者による注釈

- (4) 長沼應陽編『濃北の郷土と荘白川の山卿』岐阜日日新聞社
1925年 p.11
- (5) 岡田啓原著・平塚正雄編『新撰美濃志(訂正版)』大衆書房
1972年 pp.485-486
- (6) 白鳥町教育委員会編『岐阜白鳥町の絵画―「白山」山下の信仰と美のかたち―』白鳥町 1999年 p.65 pp.101-102
- (7) 竹下一政編『阿弥陀ヶ滝遊覧紀行―白山美濃馬場近世の滝参り美濃国郡上郡前谷村』前谷観光開発協会蔵版 1987年
pp.23-26
- (8) 「白山記」上村俊邦編『白山信仰史料集』(白山山麓・石徹白郷シリーズ6号)岩田書院 2000年 p.353
- (9) 杉崎貴英「五箇山より新出の白山曼荼羅―南砺市白山宮本《白山本迹曼荼羅図》の概要と若干の考察―」『富山史壇』
191号 2020年 p.31
- (10) 黒田晃弘「白山参詣曼荼羅と絵解き」『絵解き研究』9号
1991年
- (11) 小林一葵「白山之本開 白山開闢由来抜書」林雅彦・徳田和夫
編『絵解き台本集』(伝承文学資料集第11輯)三弥井書店
1983年
- (12) 山本陽子「白山垂迹曼荼羅考―遊行寺本を中心として―」
『仏教 芸術』157号 1984年
黒田晃弘「国神社本白山参詣曼荼羅にみる宗教的景観像」
『人文地理』44巻6号 1992年
図録『白山曼荼羅―描かれた神々と観音信仰―』福井県立歴史博物館 2014年
- (13) 大阪大『「白山曼荼羅」の世界』『はくさん』第43号第3号(通号
176号)石川県白山自然保護センター普及誌 石川県白山自
然保護センター編集・発行 2016年
- (14) 前掲註(13) p.8
- (15) 大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社 1987年
- (16) 大高康正『参詣曼荼羅の研究』岩田書院 2012年 p.13
- (17) 「泰澄和尚伝」上村俊邦編『白山信仰史料集』(白山山麓・
石徹白郷シリーズ6号)岩田書院 2000年 pp.138-140
- (18) 『信仰の道』(歴史の道調査報告書第5集)石川県教育委員会
編集・発行 1998年 p.10
- (19) 「長滝寺真鏡」前掲註(2) p.412
- (20) 「武士、学者、文人による近世の登山」『白山の自然誌38 白山
登山のうつりかわり』石川県白山自然保護センター 2018年
pp.10-12
- (21) 白鳥町教育委員会編『白鳥町史』通史編上 白鳥町 1976年
p.542-544
- (22) 日野原健司「葛飾北斎「諸国瀧廻り」をめぐる―「写生」と「奇想」―」
『太田記念美術館紀要 浮世絵研究』第4号 2014年
pp.51-53
- (23) 清水真澄「奥美濃白鳥町長滝における、環境の変化と仏像等
文化遺産の歴史」白鳥町教育委員会『岐阜 白鳥町の絵画―
「白山」山下の信仰と美のかたち―』白鳥町 1999年
pp.120-121
- (24) 「経聞坊文書」前掲註(21) p.572-574
- (25) 「文政留記」前掲註(21) p.592-595

図版出典

口絵・図2 静岡市立芹沢銈介美術館より提供

図1 竹下一政編『阿弥陀ヶ滝遊覧紀行―白山美濃馬場近世の滝参り 美濃国郡上郡前谷村』前谷観光開発協会蔵版 1987年 p.24より転載。(原図は岐阜県図書館蔵『長瀧寺道之記』所収の「阿弥陀瀧之図」)